

リフレッシュ滋賀

第12号
連合滋賀・高退協会報
発行責任者: 吉村眞明
編集責任者: 嶋澤順三
大津市松本2-10-6
電話: 077-523-0500

「近江の四季」

守山大日堂公園の近江妙蓮

滋賀県守山市川田町田中に大日堂がある。この大日堂に蓮池があり、ここに滋賀県指定の天然記念物で守山市の市花にもなっている近江妙蓮が、盛夏の中たくさん花を咲かせている。この近江妙蓮の由来を、近江妙蓮保存会が出している資料で紹介しよう。

滋賀県天然記念物 近江妙蓮の由来

守山市川田町田中の霊地（大日堂）に室町時代の初期から、珍しい蓮の花が数百年咲き続けてきた。この花を妙蓮と呼ぶ。毎年皇室、公卿、諸大名等へ度々献上されていた。

この妙蓮の花は紅色で一茎に数多くの花をつける。二個から十二個までつくのである。花の特徴は雌蕊、雄蕊が全部花弁（はなびら）になり、花びらの数は三、〇〇枚から五、〇〇〇枚にも達する。雌蕊、雄蕊がないために蓮の特徴である蜂巢（果実）はできない。



以上の珍妙なる蓮花は今から千余年の昔インドから中国へ、中国から日本の田中（近江の国）へと伝わったもので、天台宗の僧慈覚大師によつて中国から持ち

帰られたものと伝えられている。

この花の見頃はお盆を中心に約一ヶ月であるが今昔問わず、参拝、観蓮者が多い。

七月二十五日、嶋澤（副会長）と伊藤（事務局長）は、守山市に近江妙蓮を尋ね、写真撮影をした。成程、かなり風変わりな蓮花である。ツボミは桃の花を思わせ、可憐で美しい。が開花すると、三〇〇〇〜五〇〇〇枚という花弁が、ギッシリとつまっているため、少々暑苦しい感じがする。近江妙蓮をみたあと、草津市湖岸に大きくひろがる、普通の蓮の開花状況も写真にとったが、花の美しさは、やはりこちらの方が見ごたえがあるように思えた。しかし、近江妙蓮の由来を思うと、珍花としての価値の高さ、いささかのゆるぎはなく、万人一見の価値ありと、おすすめする次第。



以上

水口地区ウォークラリー

NTT労組退職者の会滋賀県支部協議会の活動として「生涯いきいき健康ウォーク」を各地域で企画実施しております。その私達の水口地域は、一三〇名の会員です。

去る五月一七日（水）に五回目のウォークラリーを実施しました。滋賀県支部協議会より野々山事務局長の参加で、今年退職された五名を含み総参加者二七名で、回を重ねることに参加者が増え幹事としては、うれしいことです。

今年のウォークラリーは、幸い天候に恵まれ、JR甲賀駅より三重県の芭蕉翁公園、新緑の里を名阪健康ランドまで四キロのウォークを和気あいあいなごやかな雰囲気楽しんでいただきました。

毎年ウォークのあとは、風呂に入り汗を流し、会食することを目的に、実施



場所を選定企画しています。会食では、少々のお酒で話がはずみ、カラオケで盛り上がり会員の「親睦と交流」を図ることができました。

次回は、大山田温泉にしようかと史蹟探訪も兼ね来年の企画を心配しています。

水口地域のイベントは、五月のウォークラリー、七月の総会、十一月の一泊旅行ですが、会員の生き甲斐づくり健康づくりに、少しでもお役に立てばと日夜努力しています。

NTT労組 滋賀退職者の会

水口地域 幹事 井狩 幸子

2001 滋賀県高齢者集会

日時 九月二〇日（水）午前二〇時

場所 ホテルニューサイチ3F

（JR瀬田駅前）

講演会 講師 前参議院議員 足立良平氏

近づく 高退連

秋のハイキング

日時 十一月三日（火）一〇時

場所 神戸・布引の滝を予定

男と女の現代風景

「年老いた夫婦の生き方を考える」

嶋澤 順三

八月二日、厚生労働省が発表した「二〇〇〇年簡易生命表」によれば、日本人の平均寿命は男性七七・六四歳、女性八四・六二歳に達していることがわかった。これで前年比男性〇・五四歳、女性〇・六三歳、寿命が延びており、男性ではアイスランドの七七・五〇歳、女性ではイスの八二・五〇歳を抜いて世界一の長寿国であることが明らかとなった。

一方で、非婚、少子化の傾向は益々強まっており、高齢者人口が子どもの数を上廻った。日本中の町や村で、子どもをみかけることが少なくなり、老人がやたら目につくようになった。日々のなれで、特に異常であるとは思わないが、四、五十年前の時代から、急に現在の街角に出てきたら、相当異様な風景にぶつかって、とまどうことになるのではないか。子どもが少なく、老人が多いというのは、健康な社会であるとは思われない。

このような時代になっても、人間の意識の方は仲々時代の流れについて行かない。例えば一般家庭の多くは、娘のいる家庭では相変「お見合い」だとか「結婚」とかが普遍的に重大事である。親は娘がとし頃になると落着かなくなつて、「お見合い」話や「結婚」話に関心を深める。日本の家庭、特に健全な家庭というのは、娘は結婚まで処女であること、娘がキズモノにならないうちに結婚させること、結婚すれば一日も早く子どもをつ

くらせること、というのが規範となつていて、この規範は、有名無実になつた今日も崩壊していない。戦後は日本全体が会社立国になり、サラリーマンが標準的な日本人ということになってしまった。そのサラリーマンを大量に生産するため、日本中に大学ができ、一流企業に就職する卒業生の多い大学が、一流大学という名声を得ることができた。そして、一流大学をめざすために、塾ができ、子どもは小さい頃から塾通いを強制させられるようになった。

一方女性には、大学出のサラリーマンの良妻賢母になることを求められ、そのために女子短期大学が全国につくられた。高校卒業では一流大学出の女房になるには、資質に欠けるということで、娘の親は娘を短大に行かせるようになった。これも親心である。

現在、短大へ行くぐらいなら、と四年制大学へ進学する女性が増中だという。事実企業側も中途半端な短大出の採用をやめて、四大卒を採用する企業がふえつつあるのは、むしろ当然である。

かつて日本では、恋愛、結婚、セックスが三位一体であった。ところが、近年になってこれが崩壊した。恋愛は恋愛、結婚は結婚、セックスはセックスであり、この三者の間になんのつながりもなくなった。恋愛すれども結婚せず、結婚すれどもセックスせずで、一体的でなくなつ

たのが、近頃の風潮である。

最近朝日新聞でも大きくとり上げていたが、既婚者のセックスストレスがふえていくという。勿論、結婚生活はセックスがすべてではないにしても、セックスなき結婚生活はどういう意味があるのだろうか。セックス抜きなら、なんで結婚なんて面倒くさいことをするのだろうか。もつとも、そもそも結婚は男と女の問題という概念が崩れつつある。結婚は男と女、女と女でも成立する時代である。場合によれば、結婚は人間と他の動物との間でも成立するのも知れない。しかし、そうになると、一夫一婦制という制度も、単なる文化の問題であるともいえるところから、それが正しいとも誤りであるとも、断言することは困難になってきている。

かねて懸案の「選択的夫婦別姓制度」導入の是非を巡り、内閣府の世論調査結果が八月四日発表された。これによると、この制度導入に賛成する者は四二・一％であり、通称を含めて、結婚後も別姓を名乗れる何らかの法改正に賛成する者は六五・一％と多数を占め、法改正に反対する者は二九・九％にとどまり、七六年（昭和五二年）以来の政府世論調査で、初めて導入賛成が反対を上廻った。しかし、世代別にみると、六〇歳台、七〇歳台は依然として法改正の必要性を認めない者が、男女ともかなり多く、法改正をいちばん強く支持しているのは、男女とも三〇歳台で、三〇歳台女性で法改正反対は九・四％と一〇％を切っている。

「夫婦別姓」の思想は、男女平等、男女同権意識の一つの側面である。結婚しても、姓名まで変えられる必要はないという考えである。近年は離婚率も高くな

る傾向にあるが、結婚と離婚を繰り返せば、女性側の姓がコロコロ変わるようになる。これでは誇り高き女性なら耐えがたい思いを強いられることになるだろう。それになにより、夫の側が妻の側の姓を名乗ってもよいわけで、それが仲々そうはならないのは、男の面子が許さないということか、それなら妻の側だって屈服する必要はないということになる。いま、現実には、妻が死んだ場合、死んでから後、夫の家の墓に入るのはゴメンだと、主張する女性もふえ、女性同志で共同の墓をつくる動きもあるようだ。そのような考えや動きが、死後のみならず、生きている間にも生じてくると、夫婦別姓にも及んでくるのは、むしろ当然であろう。

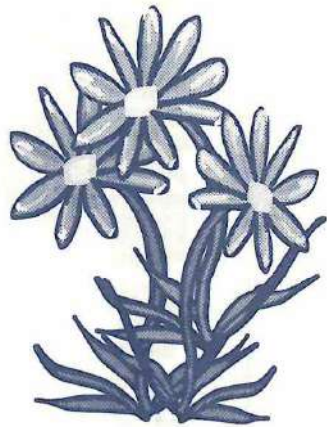
高齢化が進む中で、仲のよい夫婦の間で、いま静かに進行している動きがみられる。それは、夫婦が共にくらす中で、年老いた夫と妻が、相互干渉を極力避けて、お互い自由余生を楽しむという動きである。どれだけ仲がよくとも、趣味、交友関係など夫婦が共に同じとは限らない。また年をとるとお互いに頑固なところが露骨に出たりする。生き方にもちがいがあふ。愛情故といつても、あまり干渉されるとわずらわしい。それほど長くも生きられないのであれば、相当部分は好き勝手に気ままに生きたい。こんな思いから、夫婦間の約束ごととして、干渉を大幅にカットして、自由な生き方を楽しむ、という夫婦がふえつつある。



そうすると反って夫婦間の溝が埋まるという。

夫婦共白髪といっても、いずれどちらかが先立つことになる。一般的には夫が先に死ぬが、夫に先立たれても妻の方は至って元気である。夫が死んでから、子どもたちや、仲のよい友人たちと、年に何度も海外旅行を楽しんでいる老未亡人はおおぜいいる。こういうのをみていると、夫はあまり長生きするものではないなと思う。これに反し、妻に先立たれた老いた夫はあわれである。多くの男やメは孤独な生活に耐えており、悲惨で暗い老後がつづく。男やメに蛆がわくとはよくいったものだ。さりとて、後妻をもらうのも容易なことではないし、それが必ずしも老後の幸せにつながるわけでもない。

亭主元気で留守がよい、とはかつての流行語であるが、夫婦二人が密着してくらすのも、夫婦によって適、不適があるということだ。夫の浮気騒動や、妻の不倫騒動は近頃珍しいことではなくなった。そもそも男と女が、生涯ただ一人だけを愛し続けるというのは、美談かも知れないが、実態としては稀有な事例であろう。ならば、新婚ホヤホヤの頃はともかく、後はある程度の距離を保って行くことも反って愛情を深めたり、長続きさせるための秘策かも知れない。



ヨーロッパ小さな列車の旅 雄大なマッターホルンを訪ねて

伊藤 三郎

小生は元来旅行は好きだが、今回スイスとオーストリアの旅の機会を得た。折角の旅なので出来るだけ手作りの旅にしたいと考え、列車の旅を取り入れるように計画した。列車からの車窓のすばらしい風景や現地の人たちとのちょっとしたふれあいなど旅の遊びのひとつではないでしょうか。

まず航空券の手配だ。皆さんご存じのユニオントラベルの友人に閑空・ウィー・ジュネーブの格安航空券をとつても



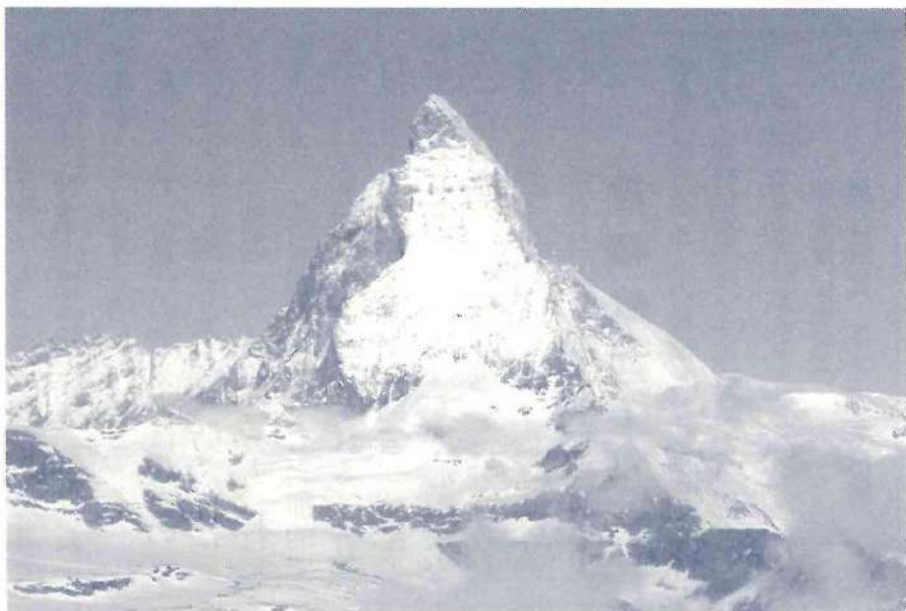
らう。ホテルはウィーンに在住の娘等にジュネーブ、ツェルマット及びウィーンのホテルを頼む。現地に到着からの移動はトーマスツックの鉄道時刻表を購入し事前に凡その移動計画を立てておいた。

五月の末閑空を出発、ウィーン経由ジュネーブへ夕方無事到着、一休みしてから早速翌日のツェルマットへのキップの手配にジュネーブ駅に出掛けた。ローザンヌからモントレーを経て、一旦ベルンに立ち寄り、その後ブリグで登山鉄道に乗り換え、ツェルマットへのキップを取った。

翌日早朝ジュネーブを出発。ジュネーブの駅を離れるとすぐに緑豊かな田園、牧草地帯が広がる。途中のモントレーは特に花と緑の豊かな観光地で、下車は出来なかったが、車窓からは見事な風景が広がっていた。

ベルンの街は世界遺産にも登録された中世の景観を色濃く残した、落着きのある小じんまりした街である。二時間程度街中を散策して目的地のツェルマットへの列車に乗った。

ブリグへ着いて登山鉄道の駅を探したが見つからない。駅員に聞いたところから駅の前だと言う。再度探したが見つからない。もう一度駅員に聞いたところ、同じ返事。駅前へ戻ってみるとなんと、今まで停まっていたバスのいなくなった向この路面に電車が停まっているではない



か。慌てて乗り込み座席に座ってやれやれと落ち着いたところで間もなく発車。家内がトイレに立ったとたん車掌がキップ拝見にきた。ご存じのようにヨーロッパの列車では乗り込むときはフリーで車内で必ず検札にくる。無賃乗車だとべらぼうな罰金が課せられるらしい。キップを持たない家内は車掌に疑われ、身振り手振りでやっと半信半疑のまま理解してもらったらしい。小生の席にきてキップを見た車掌はニコツとして安心して行った。

ツェルマットはマッターホルンの麓にある避暑地の綺麗な街で、マッターホルン登山の基地でもある。環境保護のため一つ手前の駅ですべての車はシャットアウト。街中を走る車はすべて電気自動車。五月ではまだひんやりとしている。殆どの宿は三、四階建ての山小屋風の小じん

組織紹介

鉄道退職者の会

滋賀地区本部

鉄道退職者の会全国連合会は、七月に第三十回定期総会を開催する予定です。

高齢・退職者連合構成メンバーの一員として、安心と信頼の社会保障制度、年金・医療・福祉の充実を運動の最重点として、『高齢者が安心して暮らせる社会』を目指して、名古屋・大阪地連を縦とし、地域に密着した県高退協を横の指導者と頼み、更に深まる高齢者社会に「歳をとったから…」といった黙っているわけにはまいりません。厳しい現状にはありますが一条の光を求めて頑張ります。

しかしながら、私達の組織は、分割・民営化により、大きく改編されました。旧は名古屋に上部機関をもち米原に拠点をおく滋賀地区本部について報告させていただきますが、現職組織はありません。

JRの退職者の加入が少なく、組織の将来は淋しいかぎりです。そのため、財政は基より企画した活動は当然、指示された運動も総て全員で汗を流すこととなります。ニュースも手配り、時には会費も徴収に歩みます。

まさに「老人会だから…」と言っているのではないのです。だからこそ運動の停滞が許されないのです。一度立ち止まれば、次に全員が動きだすのは大変です。蒸気機関車だからではありません。

【組織について】
国鉄時代の国鉄バス退職者も対象になるため、石川県能登半島から福井県小浜地区。県内で高島郡今津近辺の会員は、

一方的な通信連絡だけの会員とならざるをえず、残念ながら、本人死亡を一年以上知らずにいたこともありましたが、

県内七支部状況

彦根 九五名 長浜 一三八名

米原 一四四名 近江 一三九名

伊吹・山東 一五六名 東浅井 四五名

伊香 三七名

合計 七五四名(〇一年四月現在)

本会発足時は、国鉄労組組合員のみで組織でしたが、今では総ての退職者を対象とした会になっています。

【諸活動について】

◎諸会議での特筆は、財政節減のため二年に一度総会とし、総会のない年は支部代表者も含めた拡大幹事会として開催される。

◎親睦旅行 恒例として毎年十月に家族も含めて、バス三、四台で実施します。

◎共済活動 会員相互の助け合い活動として全国交通共済加入運動

種目は、火災・地震風水害・交通・マイカー・自賠責・車両共済です。

◎各支部での総会は、親睦会を兼ねて会費制で盛大に開催され、旧交を暖め、繋がりを深めています。

◎機関紙は、「なごやニュース」として隔月に発行され、滋賀では必要に応じ、適宜発行しています。

今後ともよろしく願います。

鉄道退職者の会

滋賀地区本部 会長 北川 治太郎

まりした木造の建物で、自然とマッチした風情のある建物ばかりである。ここからマッターホルンを望む展望台のあるコルナグラードまでは、アプト式の登山鉄道で一時間ほどで登る。あすの朝早く登る予定で、今日はゆっくり食事を宿のレストランで取る。

朝起きてみると曇り空だ。とにかく今日しか登る日がない。駅へ行ってみる。駅で地元の人に天気を聞いてみると、きつと今日は晴れるであろうとのこと。駅でデュッセルドルフからきた日本人駐在員に会った。彼は今回でマッターホルンを訪れたのは三回目だそう。今回も三日目、まだマッターホルンを見ていない。過去二回はいずれも曇って望めず。今日もだめかどがっかりしていた。近々日本へ帰るので今回は是非見たい一念で、小生もお供してとにかく登って見ることにした。ところが登山電車が登り始めて程なくして晴れ間が見えてきて、見事なマッターホルンが眼前に見えて来たではないか。

コルナグラートの駅にはホテル兼レストランと雄大な景色が望める展望台があり、マッターホルンやモンテローザをはじめその周辺の山々、また眼下には巨大な氷河が谷間を埋め尽くしている。五月末なのに三三〇Mの展望台周辺にはおよそ二Mほどの残雪があり、気温五度ほどで肌を冷たく気持ちがいい。お茶を飲みながらゆったりと雄大な山並みを眺め、至福のひとつときを過ごすことが出来た。

列車の旅のおもしろさの一つに人との出逢い、語らいがある。ツェルマットからジュネーブへの帰路隣に座っていたご婦人が車窓の景色を説明してくれたり、話し掛けたりしてくれる。スイスはフラ

ンス語圏、ドイツ語圏及びイタリア語圏に別れているが、片言の英語しか話せない小生にとってはおかまいなしに片言の英語で受け答えするしかない。ジュネーブへ近づいたころ前の席に乗り合わせた紳士が親しく話し掛けてきた。自分はアラブ人で日本が大好きだ。日本へは行ったことはないが色々勉強しているそうで、日本の古都や文化のことなど話してくれたりまた聞かれたりもした。

ジュネーブに到着、一泊し翌日にはウィーンへと発った。

編集後記

鳥丸半島の蓮は毎年見事な花を咲かせていますが、皆さんよくご存じのことと存じます。ちよつと変わった蓮として近江妙蓮の花を紹介致しました。一度訪ねてみて下さい。

最近の若い世代の考え方は我々の年代には理解し難いことが多い。特にセックスとか結婚に対する考え方、行動であろう。諸外国に比べても利他的であまりにも開放的に感じられる。皆さんはどうお感じですか。国家、社会の将来を考えると、ちよつと心配になるのは筆者だけの取り越し苦労なら有り難いのですが。

投稿歓迎！

会員の皆さんからの投稿をお待ちしています。原稿は左記までご送付ください。

〒520-0807

大津市松本2丁目10-16

連合福祉会館内

連合滋賀・高退協事務局